

11月24日(日)

令和七年度 外国人留学生入学試験問題

文学部
神道文化学部
人間開発学部

日本語小論文

― 注意事項 ―

- 1 問題は2ページ、解答用紙は1枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
- 3 試験時間は90分である。

N11・N14・N15B

このページには問題はありません。

問 次の文章を読んで、筆者が述べている「好きなこと」と「需要」と「供給」との関係について文章の内容をふまえながら、説明しなさい。
その際、あなたの考える具体的な例も挙げて論述すること。

ただし、次の条件を守ること。

- 一、三段落または四段落にすること。
- 二、文章は「〜である。」「〜だ。」調で統一すること。
- 三、字数は九〇〇字以上、一〇〇〇字以内にあること。

経済学者ジョン・ガルブレイス [1908-2006] は、二〇世紀半ば、一九五八年に著した『ゆたかな社会』でこんなことを述べている。

現代人は自分が何をしたいのかを自分で意識することができなくなってしまうている。広告やセールスマンの言葉によって組み立てられてはじめて自分の欲望がはつきりするのだ。自分が欲しいものが何であるのかを広告屋に教えてもらうというこのような事態は、一九世紀の初めから思いもよらぬことであつたに違いない。

経済は消費者の需要によって動いているし動くべきであるとする「消費者主権」という考えが長く経済学を支配していたがために、自分の考えは経済学者たちから強い抵抗にあつたとガルブレイスは述べている。つまり、消費者が何かを必要としているという事実（需要）が最初であり、それを生産者が感知してモノを生産する（供給）、これこそが経済の基礎であると考えられていたというわけだ。

ガルブレイスによれば、そんなものは経済学者の思い込みにすぎない。だからこう指摘したのである。高度消費社会——彼の言う「ゆたかな社会」——においては、供給が需要に先行している。いや、それどころか、供給側が需要を操作している。つまり、生産者が消費者に「あなたが欲しいのはこれなんですよ」と語りかけ、それを買わせるようにしている、と。

いまとなつてはガルブレイスの主張はだれの目にも明らかである。消費者のなかで欲望が自由に決定されるなどとはだれも信じてはいない。欲望は生産に依存する。生産は生産によって満たされるべき欲望を作り出す。

ならば、「好きなこと」が、消費者のなかで自由に決定された欲望にもとづいているなどとは到底言えない。私たちの「好きなこと」は、生産者が生産者の都合のよいように、広告やその他手段によって作りだされているかもしれない。もしそうでなかったら、どうして日曜日にやることを土曜日にテレビで教えてもらったりするだろうか？ どうして趣味をカタログから選び出したりするだろうか？

こう言ってもいいだろう。「ゆたかな社会」、すなわち、余裕のある社会においては、たしかにその余裕は余裕を獲得した人々の「好きなこと」のために使われている。しかし、その「好きなこと」とは、願いつつもかなわなかったことではない。

(國分功一郎氏の文章に基づく)